

## 李登輝元総統のご逝去を悼んで

産経新聞論説委員兼特別記者 河崎眞澄

この7月30日、台湾の李登輝元総統が満97歳で逝去されたとき、まるで実の父を失ったかのような感情に襲われて、改めて気づいたことがある。李登輝さんほど「父性」を感じさせるリーダーにかつて出会ったことがなかった、ということだ。

哲学や信念、キリスト教の信仰に裏打ちされた高潔な理想を胸に、いかなる苦難も長期間にわたって忍び、耐え抜く。一方で、厳しい現実との矛盾をいかに克服すべきか悩み抜き、まったく新しい解決手段を編み出して、その強靱な行動力で事にあたる。

それでいて人を包み込む笑顔が、とびきり優しい。握手する手が温かく、柔らかい。立ち姿はまるで剣士のようで、格好いい。理想の父親像、と言い換えてもいい。日本統治時代の台湾に生まれた李登輝さんは、大正、昭和、平成、令和の時代を駆け抜け、自らの背中を、台湾や日本の人々、とりわけ若者に見せ続けてきた。

2002年9月に台北に赴任し、その翌月、当時、交流協会台北事務所の総務部長だった垂秀夫さんのご厚意で李登輝さんにお目にかかり、ご挨拶する機会を得た。それまでも1991年5月の訪台経済ミッションへの同行取材や、1996年3月の初の直接総統選取材で李登輝さんの姿を間近に見たことはあったが、会話を交わしたのは初めてだった。いま思えば、このとき温かい「父性」に強く惹かれたことが、李登輝さんの取材を深めたい、と考えたきっかけだったろう。リーダーシップの本質は「父性」にこそあった。この人のためなら命がけで事をなしたい、と思わせる「父性」が李登輝さんにはあった。

その日から18年近く。李登輝さんへの20回を超える単独取材や同行取材を重ねてきた。台湾や中国、日本や米国など関係者の証言も集めた。数多くの書籍や、副総統時代の李登輝さんが蔣経国総統と交わした会話をつづった当時の日記も読み、台湾外交部の海外拠点から外交部本省に送った李登輝総統時代の極秘公電も探し当てた。それら



写真1 李登輝さんと曾文惠夫人と筆者（2016年11月）

をまとめて、昨年4月から今年2月まで産経新聞で「李登輝秘録」と題する長期連載を掲載する機会に恵まれたのは本当に幸運であり、記者冥利につきることであった。

ただ、その記事に加筆修正した書籍の発行日がそもそも7月31日になっており、逝去された翌日になったことに深い悲しみを覚えている。この書籍を本来なら、直接、自分の手で、あの笑顔の李登輝さんのもとに届けたかった。8月7日になってようやく、都内の駐日台北経済文化代表事務所へ弔問記帳に出向き、著書をご遺影の前にささげてきた。

それよりもなによりも、8月9日には森喜朗元首相を団長とする日本台湾交流協会・日華議員懇談会弔問団が世界のどの国よりも早く訪台し、日本台湾交流協会・谷崎泰明理事長及び同台北事務所・泉裕泰代表とともに台北賓館と総統府をたずねたことは日本と台湾の関係が、歴史的にも人的な交流としても、極めて深いことを印象付けた。森喜朗さんは蔡英文総統との会談のなかで、安倍晋三首相から事実上、弔問の要請を受けたことを明らかにしている。

総統時代の李登輝さんが、日本との交流で果たした目に見えて大きな仕事の例を2つ挙げたい。いずれも「李登輝秘録」連載のなかでも紹介したが、まずは1996年から李登輝さんが始めた「教育改革」だろう。台湾地区のみを選挙区とした初の直接総統選での圧勝後、李登輝さんが手掛けたのが「台湾」を主人公にした教科書の編纂だった。

作家の司馬遼太郎さんと1994年3月に行った対談の中で、李登輝さんは、「台湾の歴史、台湾の地理、自分のルーツなどをもっと国民学校の教育に入れろといってるんです」と、戦後台湾の教育を覆っていた根深い問題点を指摘した。「台湾のことを教えずに（中国）大陸のことばかり覚えさせるなんて、ばかげた教育でした」というのだ。

李登輝さんの指示で1997年9月の新学期から使われるようになった中学生向け「認識台湾」（歴史編）では、5万年前の先住民から始まった台湾そのものの歴史を描いている。さらに、この教科書が登場する以前はほとんど教えられなかった終戦までの日本統治時代50年間について、教育の普及や、インフラ整備などを詳細に記述した。統治に反発した抗日事件も触れられているが、史実として客観的に書かれている。

政治的バイアスのかかっていない台湾史を学んだ台湾の子供たちは、中国や日本への公平な視点をもつだろう。地理や社会でも教科書の改革が進んだ。同時に、それまで台湾では曖昧な面もあった「自分は中国人なのか、台湾人なのか」とのアイデンティティー（帰属意識）のゆらぎは、「台湾人」への収斂が始まった。台湾の政治大学が行ってきた「台湾住民アイデンティティー調査」に、意識変化が如実に映し出されている。

自分を「台湾人だ」と考える人の回答は1992年に17・6%にすぎなかった。だが今年7月には、これが67・0%と3人に2人の割合にまで増加した。教育だけではなく、さまざまな外的要因もあるが、李登輝さんは、「国家の将来は教育でこそ決まるんだ」と話している。台湾の若い人々が公平な目で中国や日本、米国や世界を眺める中で、さまざまな課題はあれど、日本に好意をもってくれる人が増えたといってもいいだろう。このことは中国や韓国、北朝鮮など、日本の他の近隣諸国とは際立った差異となっている。



写真2 台湾中部大地震の被災地に真っ先に駆け付けて活躍した日本の救援隊（左）を現場で激励した総統の李登輝さん（1999年9月、産経新聞社提供）

次に1999年9月の台湾中部大地震をめぐる動きだ。21日未明に起きたマグニチュード(M)7・6規模の大地震だった。すぐに専用機で台北から現地に飛んだ李登輝さんは、早朝から被災地で陣頭指揮を始める。実はこの震災当日も、海外から真っ先に被災地に到着したのが、日本政府が派遣した計145人の国際緊急援助隊だった。李登輝さんによるとこの震災で、台湾人の多くは日本の援助隊の行動に驚いたという。

黙々と生存者の捜索を続け、遺体を発見するたびに敬礼し、黙禱を捧げ、家族に「救命できずに申し訳ない」とわびた日本の援助隊の姿が連日、テレビに映し出された。台湾では見慣れなかった光景だといい、「あのとき台湾と日本の関係がぐっと近づいた」と李登輝さんは話していた。そのときの縁なのか、2011年3月11日の東日本大震災では200億円を超える義援金が台湾から届く。今度は日本人が驚かされる番だった。来年3月は、その東日本大震災から10年。日台の絆は深まっているようにみえる。

台湾中部大地震で深まった日台の縁は被災地支援だけではなかった。実は1999年当時、台北と高雄の間、約350キロを1時間半で結ぶ高速鉄道の国際入札が進んでいった。先日、日本と台湾で同時放送されたNHKと台湾の公視の共同制作によるテレビドラマ「路」で描かれたさまざまなシー





写真3 台湾南部の高雄港に初めて陸揚げされた日本製の高速鉄道車両「700T」型（2004年5月）

ンの、もっと深い水面下であった出来事だ。

新幹線技術を提案した日本企業連合が、入札の初期段階までは優勢だったTGVなど欧州勢を逆転して、車両と機電システムの優先交渉権を得たのは、震災から3カ月後の12月末のこと。入札は民間の高速鉄道会社が行っていたが、李登輝さんは「震災後に（鉄道会社の）トップに日本の新幹線に変えなさい、と説得したんだ」と明かした。

震災前から李登輝さんらは地震対策や安全性などから、新幹線の技術が台湾の実情に合うと主張してきたが、民間案件で総統とはいえ李登輝さんになんら決定権はなかった。ただ、李登輝さんの真剣な説得が功を奏したのか、それまで欧州勢に注目していた鉄道会社の幹部は震災後、新幹線の耐震技術に改めて関心をよせるようになり、1999年12月初め、当時、JR東海社長だった葛西敬之さんを台北に招いた。葛西敬之さんは耐震技術セミナーで、「1995年1月の阪神・淡路大震災で（新幹線の）危機管理が機能した経緯を話した」という。震災後の台湾が求めた解決策がそこにあった。

1999年末に優先交渉権を得た日本勢は翌年12月、正式契約を結ぶ。2007年に開業した高速鉄道に、こうして日本の新幹線技術が採用された経緯がある。震災はもちろん不幸な出来事ではあったが、自然災害の多い日本と台湾の協力関係を深め



写真4 1984～88年の副総統時代に、総統の蔣経国さんと交わした会話を克明に記録した日記を見せる李登輝さん（2017年8月）

る大きな契機になったことに疑う余地はなく、その影の主演は実のところ李登輝さんだった。

総統時代の李登輝さんと、日本との関係を考えてときの例にすぎないが、ここで強調したいのは、いずれも李登輝さんが「親日家」だからとった行動ではないということだ。日本と日本人の良さも悪さも、優秀な点も問題点も熟知した李登輝さんだからこそ、あくまで公平に冷静に、ロジカルに判断した上での行動だった。冷徹な国際社会の現実が支配し、選挙では有権者の審判が下る政治の場に、好き嫌いといった感情論など入り込む隙間などないし、紛れ込ませてはならない。新聞記事も当然、そうだ。

それでも李登輝さんの判断や行動、言葉の「行間」にはなにか、にじみ出てくるものがある。李登輝さんはこうも話していた。「なにごとも誠の精神、誠実自然ですよ。でも、それだけじゃあ、だめだ。最後まで実行しなさい。実践躬行だ。それが何千年もかけてはぐくんできた日本の、日本人の立派な精神なんだ。もっと自信をもちなさい」。台湾にとっても日本にとっても、李登輝さんは間違いなく、「父性のリーダー」であった。